

「背広の浮浪者」の取材経験から、松沢常夫は、明治時代の浮浪者生活の一端を、この小説に描き出した。この小説は、明治時代の浮浪者生活の一端を、この小説に描き出した。この小説は、明治時代の浮浪者生活の一端を、この小説に描き出した。

明治時代の浮浪者生活の一端を、この小説に描き出した。この小説は、明治時代の浮浪者生活の一端を、この小説に描き出した。この小説は、明治時代の浮浪者生活の一端を、この小説に描き出した。

#### 明治時代の浮浪者生活

明治時代の浮浪者生活の一端を、この小説に描き出した。この小説は、明治時代の浮浪者生活の一端を、この小説に描き出した。この小説は、明治時代の浮浪者生活の一端を、この小説に描き出した。

### 「背広の浮浪者」の取材経験から

●松沢常夫

## 二 はじめに

“背広の浮浪者をたずねて”のルポを中心に報告します。

まず、このルポができあがる経過をお話します。あのルポにたいして全日自労以外の組合の機関紙担当の方々から、いろいろ感想をいただくなど、かなりの反響をよんでいるわけで、その理由を私なりに考えたことを発言してみたいと思います。最後に、今後の課題といったことをお話したいと思います。

## 二 動機

取材のキッカケは、毎日新聞の記事でした。新宿で救世軍の慈善給食車に並ぶ、背広にネクタイ姿の浮浪者がふえている、という記事は、大きいものだけでも三回のりました。

私は、以前、山谷や上野公園での給食のようすを取材したこともあり、一回目の記事がでた時にはなったものかどうか、あんなものだろう、という勝手なイメージをつくって、自分が取材に行こうとは思いませんでした。

そうこうするうちに、一面に『サンデー・レポート』として、大きくとりあげられるのです。この記事は、「まだ完全に浮浪者になっていない人がたくさん並んでいる。」「なまけ者」と決めつけがちだが、ちがう。国会での議論も現に企業に属している人の雇用をどう守るかであり、そこからはじきだされた人びとのことは問題外になっている。社会の底辺で一日も早い政治の助けを求めている男たちがいることを忘れないでほしい」というもので、今の失業の深刻さと、政治の盲点、いや、本質的な弱点を、みごとに突いた記事でした。

しかし、この時の私は、この記事を斜め読みしたくらいで、バツと反応するということはありませんでした。一番反応したのは、うちの中西委員長でした。締切り日になって、これを全文転載しろ、というのです。すったもんだして、紙面のつごうもあり、一部カットして転載したわけですが、活字になる前、大組をしている時から全損保の松

浦さんに「あつ、これ載せるんですか、うちでも『明日は我が身か』って、たいへんな話題になつてゐるですよ」と声をかけられました。私は、改めて、たいへんな問題なんだなと思いましたが、まだ足が出ません。しかし、委員長が、この問題を大きくとりあげると指示してきたことは重大でした。

つまり、全日自労の内部にも『浮浪者』とか、『山谷』とか聞くだけで、政治的には重要だが、組織できない、あんなのにかかわるのは金をドブに捨ててゐるようなもんだ、という考えが多かれ少なかれあって、たとえ、私が取材に行きたいと思つても、なかなか言いだせないような雰囲気もあつたわけです。

そして、偶然、三月十日に転載の承諾——事後承諾でしたが——を得るために毎日新聞に電話をしたら、「今日が給食の最後の日だ、担当の吉川記者も行くから、一緒に行つたらどうか」と、親切に言つてくれたわけです。だから一日遅く電話していたら、あの取材は不可能になつていたのです。

毎日新聞社で吉川記者に会いました。吉川さんは「浮浪者は『なまけ者』と言われるが、あそこの人はまだそうではない。しかし、急速に落ちこんでいく。十一年間も働き通したけど、首になつてここへ来た人がいる。渋谷に娘がいるが、訪ねていけない人もいる。まったく悲惨だ。ある政党の国会議員が現場に行つたことがあるが、あとでインタビューしたら、『あれは都の問題』『これは区の問題』と言つて自分で何ができるかを考えようとしなない。まったく官僚主義だ。現に困つてゐる人にたいして一つでも二つでも、できることはないのか。そういう立場で考えなきゃいけない……」と、非常に物静かに、しかも一語一語に力をこめて話すのです。全日自労の資料も「ぜひ教えて下さい」と、ていねいに受けとつてくれました。

### 三、 “地下社会” と慈善

一度わかれて、夜八時に新宿西口に行きました。吉川記者は、ボランティアの一員というかつて、救世軍の車にのつてきました。私は、暗いひさしの下の列の後に並び、いっしょに行つた総務・企画部の永戸君は、吉川さんの弟

分ということでは話をきくことにしました。

いろいろ聞こうとは思いましたが、話しかける雰囲気ではありません。「今日で終わりだというけど、他でやってませんか」と聞いて、「上野でやってるようだよ」と答えてもらうのが精一杯でした。やがて、車が二台、「神は愛である」という字をライトで浮きたたせて、音もなく、スーッと横づけします。だれも何も言いません。カレールイスをもらうところで、パチパチ写真をとられるんで、サーッと顔をかくすようにして、反対側へ行って、食って、翌日の弁当をもらっておわりです。

だから、私はカレーを食べただけで、永戸君の方がボランティアということになってますから、食べてる人の肩になれなれしくサッと手をかけて、「おじさん、これからどうするの、仕事あるの」なんてやっとなんて聞いた話がこの記事の前段のネタになったわけです。

すぐに、みんないなくなっちゃったんですが、新聞記者らしい人がいるんで、声をかけたら、時事通信の名刺をくれました。喫茶店で少し話しましたが、池袋の警察づめだそうです。彼も、初めてで一言も聞けなかったそうで、私たちの聞いたことを教えてあげました。

国電の改札口まで戻ってきたら、さっき会ったばかりのほんとに背広にネクタイの白髪の老人に、バッタリ会ったわけです。それで、喫茶店に誘って二時間ちょっと話をきくことができました。

この人は松下さんという五十七歳の人で、もう半年くらい「地下生活」をしているのですが、私なんかよりずっときれいなことをしています。

奥さんとの関係で家出てきたんですが、老後のことを考えるとずっと働けるところでないとダメだし、好きな仕事をしたい、というので飲食店の経営コンサルタントの資格をとる勉強をしているそうです。あとで、松下さんの言っていた図書館をひょっこり訪ねてみたら、『今東光自伝』なんかを読んでましたけど。

松下さんは、新宿の「地下社会」の仕組みを説明してくれ、私が独身だというと、あんた結婚するときには趣味が

合ってる人を選べとか、いろいろ注言をしてくれました。『慈善』ということについても話しあいましたが、私が愛知の熱田分会で、十円とってうどんだかなんだかの給食をしていたことを話すと、「そう、百円でもとってくれた方がいいんだ。救世軍は、さも思んでやるといふ感じだ」と批判していました。

エンゲルスが『イギリスにおける労働者階級の状態』の中で、「搾取者の側の慈善というのは、被搾取者に当然属すべきものの百分の一くらいしか与えない。このような慈善は人間性を奪われ、社会から追放された餓民にわずかのほどこし物で、『人間失格』の烙印をその額に押しやるために、まず彼の最後の持ち物、つまり人間性に対する彼の要求を断念しなければならないことを要求する」と言っていますが、松下さんも同じようなことを言ったわけですから、同じネグラにくる若いのをつかまえては説教している、なんとか早く立直らせてやりたい人だ、というので、その人たちと懇談する機会をつくってくれと頼んで、電話代ということで千円札一枚渡して、失業者集会にも来てほしいと話してわかったです。

一週間後、私と永戸君と、高田中執の三人で若い人二人と松下さんの三人に会うことができました。若い人には、いろいろな事情を聞いてから、『そんな生活していいのか』『もっと勇気をもて』『それで自由を満喫しているなんて、どんでもない話だ』とか職安に登録して働いた方がいいとか、いろいろな話をしました。私はもっぱらメモ役で、他の二人が、どんどん質問というか、思想闘争をいどんだりしたわけです。だから、相当つつこんで聞きました。

二十九歳の前野さんは、手配師を通じて、二千九百円の仕事に行っている。京都の家には目が不自由な父と、半身不随の母が生活保護でくらししています。京都にいた時は、サラ金に勤めていたが、自分の家と同じような何もない家に行くと、おどかしてとりたててくるようなことはとてもできなくてやめたというのです。

二十四歳の釘丸さんもそうですが、結局、地元の仕事がなかったり、家庭のことなどで東京に出てくるが、身よりも保証人もなく、半年くらい新聞配達店や喫茶店などで住みこんで働いたあとは、転々として金がなくなって地下でねるようになるというのです。

こういうケースだったらいくらでもあると思います。今、第三次産業にどっと流れていきますけれど、そういう人はほとんど不安定雇用という形でふえています。その一番低い層というか、だれでも、すぐ落ちこめる層、条件のところがあつたということ、ほんとになんとかしなきゃ、と思ったわけです。

執筆にあたつては、一緒に行った人と、中心テーマを「政治と人間」にする、この人たちが自身が本当に立ち直る自覚をするためには何が必要かなどをできる限り浮きぼりにすること、などを打合せて書きました。

#### 四、編集書記

こうした経過から、私はつぎのことを問題にしなければならぬと考えています。問題提起だけです。報告します。第一に、一つには私の中にも、吉川さんが言う「ある国会議員」のようなところがあつたのではない。吉川さんは現実をありのままに見ようとする、まず「人間」から出発する。これに対して、私は「浮浪者」という概念、イメージから出発して、足を出そうとしない。吉川さんは、生身の人間を見ようとしたから、「背広の浮浪者」なる新語もつくることができたんだと思うのです。

第二、これは私の個人的な問題ではなく、全日自労全体の問題でもあるということです。こういう人たちに一番近いところで運動している、こういう人たちの何人かは組織している組合であり、口では失業者は深刻だ、深刻だ、と言っているのに、救世軍に遅れをとり、毎日新聞にも遅れをとってしまったということは、どういう問題なのかという事です。

第三は、単に全日自労だけの問題でもないのではないかとことです。というのは、このルポがのつて、よその組合の機関紙担当者などから声をかけられたわけですが、「あれ、読みましたよ」という言い方なのです。この言葉の意味するものは、一つには、「明日は我が身か」という不安が相当に広がっている、という現実を示すとともに、「よく救世軍のカレーライスまで食つたな、よく入っていったな」という点での共感を示しているような気がします。

つまり、「明日は我が身」という不安はあるけれども、労働組合としては、無関係になっているのが現実ではないでしょうか。それは、下請やぼう大な未組織労働者、失業者などといっしょにたたかうという姿勢の弱さにもあらわれていると思います。

第四は、その機関とのかかわりもふくめて、書記の位置とやる気の問題が問われていることです。こういうところへも、どんだん足を運ぼうという気迫が出なくなるような状況はないのか。だれかが個人的に目を向けたとしてもどうせ書いても、のせられないだろうから、書かない、行かない、となつて、だんだん、大禍なく過ごそうという気持ちにおいやられるような位置に、多くの書記はいないか、ということです。「あれ、読みましたよ」という反応は、半面では、「自分も取材に行きたかったんだ」という気持もあらわしていると思います。機関紙担当者や書記の能力積極性をどんだんのばしていくことができるように、労働組合自体を変革していくこと、書記の位置と任務を明確にしていくな課題は、きわめて重要だと思います。

## 五、心に灯をともしルホ

それにしても、遅まきながら全日自労は取材ができて、一面全部という形でとりあげることができたのはなぜか、ということを考えてみたいと思います。

第一には、全日自労の方針です。いま全日自労は、失業保障を確立していく、とりわけ失業対策事業の再確立をめざすという方針をかげ、失業者の組織化、失業者闘争の強化をはかっているわけです。

第二には、そういう方針にもかかわらず、なかまの中に「よそ者のことはどうでもいい」「なまけ者だから仕事がないんだ」「これまで高給とつて、今さらなんだ」という考えが、広範にあるからです。

「じかたび」五月一日付の一面は、三十軒たずね百軒に電話したけど、職がないという五十五歳の安藤清子さんの話の特集でしたが、失対のおばさんたちは、安藤さんのことをウワサで聞いていた限りでは、「そんだけ訪ねてな

いわけがない、選んどうるんだ」という考えでした。それが、安藤さんの記事がのり、じかに安藤さんの訴えを聞くと本当にそうなのか、と涙を流して聞くわけです。だから、本当に失業者を結集して、いっしょにたたかうには失業者の実態を、典型を、とことん知らせて、なかまの心に灯をともし必要があったわけです。そして、教宣部にできることは、とことん、その失業者の中に入れていくルポだったのです。

第三には、機関紙の位置づけの高まり、特に、外部、地域への読者拡大がすすんでいることです。「じかたび」は個人有料購読制を原則にしている、先日、八万部をこえました。最高記録です。組合員は約九万ですが、八万部のうち、少くとも一万部以上は外部に出していると思われます。八月の定期大会までに、あと二万ふやして、十万にしようとして運動しているのですが、これも、地域の人たちが対象です。今の失業問題、失対事業についての理解を深めてもらい、全日自労といっしょに運動をすすめてもらおうということでふやしているわけですが、失対賃金がどうのこうのということが、いつも一面にのっているのでは、読む気にならない、一面は、一つの問題を掘り下げて読ませる記事にしようと、二月ごろから大刷新をはかったわけです。

第四に、決定的だったのは、私自身がこういう内容をつかめて、書こうという気になったことです。取材してみても非常に感動させられ、どうしても書きたいという情熱がでてきて書けたということです。

三月二十六、二十七日に、全日自労は東京で一千人の失業者集会をやりました。二十六日は春闘共闘の総決起集会とデモに合流したんですが、ここに、広島島の因島の造船下請失業者が十一人参加しました。「一番困っている人を紹介して下さい」と言ったら、親子二人ぐらして、両方とも一月と二月に失業した人がいました。京都の紡績の婦人は一人ぐらして、昨春秋に倒産、解雇。この八月には社宅も追いだしをくらう、そのあとどこに住んだらいいか、と言うんです。別れただんなのことを聞くと、「そんなこと聞いてどうするんですか、いくらか足しにでもなれば言うけど、いいかげんにしてよ」と言われてしまいました。

こんな話をきいて、もう、えらく興奮して、デモ行進中に宣伝カーにとびのって、マイクを握って、「この隊列に



は、こういう人や、こういう人が参加しています。都民のみなさん、明日は我が身ではありませんか」と、やったわけです。

そういう気持になるものが、背広の浮浪者をたずねた時もやっぱり、あったわけです。

第五に、集団取材といいますが、集団調査といいますが、私一人だけで行ったのではなくて、中執と、もう一人と三人で行って、こんな事態にさせている責任がどこにあるのかを自覚させ、一緒にたたかうという立場に立ってもらふよう話しながら、実情も聞いた、ということが大きかったと思います。

## 六、これから追求してみたいこと

最後に、この「背広の浮浪者問題」について、どういう点を追求していこうかと思っているかをお話します。

一つは、二千九百円で働きに行ってる前野さんのところへ行って、一緒に働いて、暮らして、なんでここに来たのかということと、なんで立ち上れないのか、どういうアタックをして、どういう障害にぶつかったのか、という、立ち止れない仕組みを明らかにしてみたいと思います。

同時に、立ち上れた経験も、くわしく調べてみたいと思っています。山谷の労働者で、血を売って組合費を作ったという四十七才の仲間がいます。組合に入ってがんばったということ、週二回、土、日だけです、定期的な仕事ができたとしたことなどで、生活に張りリズムができ、山谷の食堂で働いていたお婆さんと結婚して、このあいだのメーデーには、一緒に来ていました。今は都営住宅にはいれて、生活と健康を守る会でも活動しているというんです。この仲間の場合も、くわしく聞いてみたいと思っています。

もう一つは、政治的に、いくつか重要な問題があるわけです。救世軍とは何かとか、山谷や釜ヶ崎などでも、「極左集団」とみられる人間を中心に、毎朝のように給食活動がやられていることをどうみるのか、追求してみなければいけないと思います。

さらに、今後のルポについていえば、紙面のワクに限られない取材とか、一つの取材のあと、それを本部として、

あるいは分会として、どの運動にしようとしているのか、どう解決しようとしているのか、といったこともふくめた記事にするとか、いろいろ足りない点を補っていかねければならないと考えています。

みなさんからいろいろ教えていただければ幸いです。

## “背広の浮浪者”をたずねてみました

この人たちにどういふ対策が必要なのでしょう

“慈善”給食車に並ぶ“背広の浮浪者”がふえている——と報じた毎日新聞（三月五日付）の記事は、大きな反響をよんでいます。新宿に、この人たちをたずねて話しあってみました。

いつまでもこんなことやつてないさ

週二日のカレーライスも、今冬はこれで最後という三月十日。

はなやいだ蔵王行きのバスが列をなす新宿駅西口、超高層ビルの谷間に肩をすぼめて並ぶ男たち、約六十人。

多少よごれてはいるが、ジャンパーや背広にネクタイ姿もまじり、静かに救世軍の給食車を待つ。タバコも空きカンにきちんとする。

カレーライスは大盛り。あったかい。じゃがいもが格別。みんな、暗いひさしの下にかけこむと味わうようなどなく、一気に、のどの奥へおしこむ。

どんぶりを返し、弁当をもらうと、くもの子を散らすように四方八方へ。その間、約十五分。

たしかに、浮浪者生活数年の男たちとはちがう。決して無気力ではなく、働きたいという希望をもっている。

「千葉の小湊に妻と二人の子がいる。こんなことして  
るなんて、知るはずがない。建築関係なのでもうじき仕  
事もでてくるだろう」（ジャンパー姿・40くらい）

「いつまでも、こんなことやってないさ。おれは大物  
を知ってんだ」（電話番号をビッシリ書きこんだ新聞を  
もつ男・50くらい）

### 「慈善」給食にはきびしい批判の声

だから、「慈善」給食にたいしても、「助かった」と  
礼はいうものの、「さも恵んでやるという感じだ」「地  
下道からここまで来れない身体障害者や高齢者に、やっ  
てやるべきだ」と、きびしい。

昨年九月から、地下で寝泊りしながらも、白髪にはい  
つもクシをいれ、洗たくしたワイシャツに背広とネクタ  
イの松本さん（仮名・57）を喫茶店にさそった。

こちらの身分を明かすと「全日自労なら知ってます。

私も二十四年に引きあげてきて、二年くらい失対にいた  
ことがあります。レストランの支配人などをやってきま  
したが、勤めてたところがつぶれたのと、妻とのゴタゴタ  
で、家をとびだしてしまったんです。今は、飲食店の経

営コンサルタント（相談役）の資格をとるため、昼間は  
図書館がよいです」とうちあけてくれた。

### 保証人がなく、手配師通じた仕事へ

一週間後、松本さんのネグラによくくる若者と、話し  
あった。

前野さん（仮名・27）と釘丸さん（仮名・24）。二人  
ともよくみなければ、よごれもめだたないセーターを着  
て、髪もサッパリ、ヒゲもそっている。「浮浪生活」の  
イメージはまるでない。前野さんは、この二カ月ほど手  
配師のマイクロバスで、五反田の製カン工場に働きに  
っている。八時から四時半までで二千九百円。ここから  
食費三百円が引かれ、帰りの交通費は自前。学生アルバ  
イトは三千五百円なのに。約百人が働いているが、保険  
はまったくないという。

「とにかく、うえるるし、明日はどうなるかわからん  
でしょ。仕事おえたら、牛井くって、隣りのラーメン屋  
にかけこんで、パンかって、ドヤ代七百元払って一銭も  
なくなつて、目をつぶつたら、すぐねちゃう」

家は京都。父は目が不自由、母は半身不随で生活保護

ぐらし。前野さんは、二年前まで、サラリーマン金融会社につとめていたが、「一銭もないことがわかってる家へ、夜中におしかけ大声だしてとりたてるのは、とてもできなくて」やめ、上京。

半年間は、喫茶店に住みこみ、毎月一万円の仕送りをしていたが、やめてからは転々。パチンコ屋の住みこみに応募しても「保証人をつれてこい」でダメ。

アオカン（野宿）と、カレーライスにすがりつく毎日。運転免許証も一日二百円のコインロッカーにいったまま引きだす金がない。

ときどき右腕をさすっているので、きくと、「ベルトコンベアにはさまれたんです。どうってことなかったからよかったけど、保険も労災もないのっておそろしいですね。でも文句いったら、いくらでも新顔はいるんだとおほらい箱。どんなことをしてもコンクリートでねるよりましですよ」

### “職業訓練を”に一瞬、目を輝かす

七年前、大牟田からきた釘丸さんは、温和な顔だちでみるからにのんびり屋だ

「今は何もやってないですよ。まあ、死にたかないからみえや外聞もすてて、これで生きてます」と、モグラのように両手でゴミ箱をかきわけけるしぐさ。

前日、売れのこった寿司やハンバーガーが折り箱や袋に入ったまますてられる「時と所」を心得ていれば食うのに不自由はない、というわけ。

同行の永戸書記が、「それじゃ自由を満喫しているのか」と水をむけると「マンキツなんて言葉、とてもでないですよ。いまは冬眠中かな。ま、春の陽気とともに少し動きだそうかと思ってますけど」

全日自労が失対事業を職業訓練的な内容をもたせて再確立させようと、運動していることを話すと「職業訓練、うけさせてくれるんですか」と、一瞬、目を輝かせた。

### 失業の不安は47%政治の根本を問う

倒産による失業、首切りや地域破壊、職場での人間関係の破壊、家庭破壊など「明日は我が身か」の現実が急速に進んでいる。

説売新聞の世論調査（三月二十一日付）では「失業

の不安」を四七%もの人が感じているという。だから、この人たちのことを「本人の責任」「浮浪者問題」として片づけることは許されない。

しかし、この人たちに政治は何もしていない。二人の例だけでも職業訓練、手配師の完全禁止、最低賃金制、各種保険・労災の完全適用、低家賃住宅、保証人など、解決しなければならぬ問題がたくさんでてきた。一日も早い対策がもとめられている。

二十六、二十七日の失業者大集会は、こうした人たちが自身が力強く自立し、政治が、だれのためになければならぬのかを、鋭く問うものとなろう。

### 30 軒たずね一〇〇軒に電話

せめてムダ足ふませるな

一杯飲み屋を首切られてから四カ月。新聞広告や、はり紙などを見て、町の商店や病院など三十数軒をたずね百数十軒も電話したのに、まだ仕事につけない五十五歳のおばさんをたずねてみました。(本部教宣部・松沢)

大みそか、たった五万円でクビ

安藤清子さん、55歳。昭和二十八年、六歳・女、五歳・男、三歳・女の子をおいてだんなに先だたれ、義理の母に子どもをみてもらって二十年間、中央市場の食堂で働きとおしました。四十六年には、名古屋市飲食店組合

から、優良従業員として表彰され市長盾をうけたほどです。ところが、昨年十二月三十一日、五年間働いた「角重」という一杯飲み屋を首になりました。経営者がかわって手持ちの人間でやるからあんたはいらない、とおっぼりだされたのです。

給料は八万五千円でしたが、健康保険も雇用保険もなく、退職金はたった五万円でした。

病床の実父を看ながら職さがし

子どもたちが独立して、一人ぐらしの安藤さんは、九

十二歳の実父が倒れたこともあって、三月末まで弟の家で看病にあたることで、食事のめんどうをみてもらい仕事をさがしました。

「どっかはあるだろう」と思っていたのですが、新聞やアルバイトニュースを見て、一日に三軒か三軒電話をかけ、三十軒くらいたずねても、まだ、みつかりません。

ノリのカンにしまつてある封書は、全部、断わりの通知。国鉄に店をだしている合名会社・以満以商店の通知には、こうあります。

「不況を反映してか、幸い想外の応募書類の送付に接しました。種々選考の結果、貴女様は比の度の応募には選外と決定しました。何卒、悪しからず御了承下さい」  
「不況」だから「幸い」とはよくも言つたものです。

でも、「ここはきちんとしてますよ。あとはもう、電話で返事をするって言つたきり、何も言つてこないんだから」という実態です。

満員だというなら広告をはがせ

「この病院も、あの喫茶店も……」アパートから、瑞穂（みずほ）区役所をへて十五分ほど歩く間にも、断わら

れた店の前を四軒も通りました。

大きな求人広告がでている「一休」というお好み焼屋に入つて、コーヒーを飲みました。バスの中から広告を見つ、雨のふるなかつてきて、ただ聞くだけというわけにもいかなないので、お好み焼を一つ食べ、会計のところでたずねたら、「もう決つた」と断わられた店で、店員にたずねると「まだ募集してるようですよ。支配人は今日、きません。急にやめる人がいるから広告はだしっぱなしにしてるんじゃないですか」

安藤さんは「満員になつたなら広告をはがすべきだ。あてにして、ムダ足とムダ金を使う人がどれだけいることか。それが、しゃくにさわるんだ」と、たまりかねたように言います。

地獄で仏のピラ神だに納める

安藤さんが全日自労と出会つたのは、一枚のピラから。「自分自身に、あいそがつきて憎けなくなり、ヤケになつて二日も三日も新聞を広げる気にもなりません。三月十七日、氣をとりなおして出かけましたが、だめで、トボトボ帰ってきたら、神宮前の駅でピラを配っ



てたんです。家に帰って広げてみたら、私のような失業した人のことが書いてあったので、地獄で仏にあった思いで電話したんです」

全日自労・熱田分会は、安藤さんといっしょに職安に行き「角重」で働いていたときの雇用保険がもらえるようにしました。このピラは、豊川稲荷のお札といっしょに神だにかざってありました。

「私が死んだら、ピラをいっしょに墓の中にいれてほしいと、娘たちに言っているんです」

### 小さな店の一人の失業者だけど

安藤さんは三月二十六、二十七日の失業者集会にも参加しました。

「議員要請で国会に足をふみいれたとき、竜宮城の乙姫様にでもなったような気がしました。自民党の国会議員の秘書に失業問題を訴えたとき、成田であんな騒ぎがおきてまたカネがよけいにいる」と言っているのをきき上の人はこんな感覚しかもっていないのだから、下の方の人が、もっと運動をもらいあげないといかんと、つくづく思いました」

四月二十日、市内四分会から百二十人が集まった会議でも安藤さんは実情を訴えました。

それまで、「まともな人なら、二十軒も三十軒も歩いたら仕事はあるはずだ」と言っていたなかまも涙なしに話をきくことはできませんでした。

安藤さんは言います。

「小さな店の一人の失業者が訴えていいものかどうかと、卑下していました。でも私の話をテープにいれて、みんなに聞かせるんだ、と言ってくれたおじいさんがいたんです。私のように実際に経験したものが、一生懸命やらなければいかんと思いました」

キチツとしたところで働きたい

工場がつぶれて、たくさんの人が失業すると、大きな問題になります。

でも、こういう町の商店で働いている人たちのことは見落とされがちです。

安藤さんは訴えます。

「私は働かせていただいたら、少々つらくても、泣いたってしんぼうします。今度こそ、キチツとしたところ

で働きたい。そして、せめてムダ足はふまなくてすむようにしてほしいと思います」



### たずねた店

「とても、全部はおぼえてないけど」と、安藤さんが話してくれたのは――。

①名鉄百貨店の洋菓子売場へ面接に行ったら、考えておくといつて、履歴書だけでもどってきた、②栄の織物問屋では表に求人紙がはってあるのに、人はいらないと断わられた、③青柳うしろの売店で面接したら四十歳以上はだめ、④桜山のレストランでも、玄関に募集の紙があったけどだめ、⑤笹島の飲食店では、だんなは、よい返事だったが、おかみさんに断わられた、⑥ワシントンビルの飲食店では多分使いますといいながら、履歴書だけボンと送り返された、⑦瑞穂区のレストランは、一日か二日のうちに電話するといったきり、⑧中村区の寿司屋や、⑨西区のお好み焼屋は年齢不問と広告にあって、⑩納屋橋の寿司屋や、⑪北区の寿司屋では、あんなのような人にきてもらいたい、と

いわれたが、年を言ったら、あとで返事をするといったきり、⑫新瑞穂のマーシャン屋も、年が多い、とだめ、⑬今池の食堂や、⑭東新町のネクタイ屋では、もう決まったからと断わられた。⑮桜山美容院の手伝いに行こうと思ったら、四十歳まででないとだめ。どこも、お茶さえない。

採用すると言われたのは、ふみ台に乗ってバスを清掃する仕事で、月四万八千円のところだけ。それでは生活できないので断わった。

ついでせきルポへ原文『じかたび』78・6・5号から

### 30軒たずね、一〇〇軒に電話の安藤さんその後

五月二十八日、名古屋市の安藤清子さん宅をたずねました。五月一日付『じかたび』に、“30軒たずね、100軒に電話。55歳の婦人に職なし”と、のせたときから約一カ月。まだ、仕事はありません。（本部教宣部・松沢）

じつとしているとイライラしてきて

コカコーラをだしてくれて「いい、いい」と言うのにウチワであおいでくれます。

「いま、おつれ（友だち）と買い物に行ってきたんだけど、おつれの知りあいで四十五の女の人、タイプもで

きるっていうのに、年だからって、働き口がないんですって、私のことばっか考えてたけど、四十五でもなあーって思っちゃいましたよ。じつとしてるとイライラしてくるの。いつまでこんなことが続くのかって思うと、気が変になってくる。組合で、職業訓練にいられてくれるっていうから、それを申しこもうかと思ってます」

テーブルの上には「読みなさい」って渡された『学習の友』。“五月分領収”の印がおしてある真新しい組合員証、“たずねた店をちゃんと書いとくんだよ”って、もらった手帳を大事そうに見せてくれます。

かあちゃん、バカか、みつともない

「こないだの『じかたび』、父に見せたら息子は独立しているといったって、面倒みようとせんのか、って言われたんだけど」ときくと、思いがけない返事がかえってきました。

「はずかしいから言わないでくれって、とめられてたんだけど、息子も私と同じで、一月から失業してるんです。四月で保険も切れるって言ってた。ほんとに見てかわいそう。息子に『じかたび』見せたら、『かあちゃん、バカか、たわけ、みつともない』って。私が、『何がみつともないもんか、ドロボウしたわけでもなし』ってわめいたら、だまっちゃったけどさ。娘はゲラゲラ笑ってるの」

失業は本人がだらしがないからだ、みつともないことなんだ、という見方は、まだまだ根づよくあります。

安藤さんも「仕事をえらんではないんだ」って、カゲロをたたかれたことがあります。職安で保険をもらいにきた人が「あんた働く気があるの」って、言われてるのを見たこともあるそうです。

「あんなに言われてまで雇用保険をもらう気にはなりません。分会で話したら、上の人や金をもってる人はそういう目で見るんだ、そういう口にしたらいかん、って言われたけど、働いた金なら尊いし、気分的にもほんとに早く働きたいんです。年をとってもひけめを感じないで働けるところを、市や政府がつくってくれたら、一番いいと思います」

弟のお嫁さんも全日自労に入ってた

いま、安藤さんには一つの確信がうまれています。

十日ほど前、お父さんの葬式で、こういう組合に入って失業者大集会というので東京に行ってきた、と話したら、弟のお嫁さんも全日自労に入っていたことがわかったのです。「組合」といっても、何のことかわからなかった娘さんも、何かあると「組合に相談したの?」と言ってくれるようになりました。

「私は、自分さえ一生けんめい働けば、長く使ってもらえると思ってたの。今ごろ、こんなめにあうなんて、ツメのアカほども思わなかった。だから、ショックで、自分一人で考えてると、『ああ、私は悪い星の下に生ま

れたんだ」って、気がめいってしょうがなかった。あのとき、全日自労のたった一枚のビラに行きあわなかったら、ほんとにどうなっていたかと思えます。人間って、自分に当惑すると、何をするかわからないからね」

いまも、神棚にあげてあるビラの話になると、涙ぐみチリ紙をまるめて目頭をおさえます。

こんど、友だちにも紹介してあげる

「友だちが言ってたという四十五歳の人にも、全日自労を紹介してあげたら」と言うのと、

「そうね。こんど言ってみよう」。

「じゃ、そろそろ」と、おいとましようとしたら、

「夕飯、たべてもらおうと思ったんだけどお冷やだから」と、すまなさそうな顔をして見送ってくれました。



### 小さな商店に望むこと

小さな商店にたいして、安藤さんがせめてこれだけと望んでいることをまとめてみました。

#### △求人広告について▽

①求人広告には、年齢制限、仕事の内容、賃金などおまかな点でも明記してほしい。

②定員がみたされたら、すぐに広告をはずしてほしい。

#### △求職者への応待について▽

①求職者の希望、条件などをよく聞いてほしい。外見だけで判断せず、どれだけ働く意欲と体力があるのかためしてほしい。

②「採否の返事をする」と約束したらかならず守ってほしい。

③店の責任者がだれなのか、はっきりしてほしい。

④店員にも、求職者への応待を指示してほしい。せめて、お茶くらいだすとか、人間的なあつかいをしてほしい。

原 一彦氏

1928年生まれ。『ぜんこう』編集者。著書に、「日本人の見た在日朝鮮人」  
(連合通信社刊・共著)「ルポルタージュ生活記録」(協会)「ルポルタージュ  
職場」(新日本新書)「取材活動とルポルタージュ」(協会)などがある。

松沢常夫氏

1948年生まれ。横浜国立大 全学連「祖国と学問のために」編集長を経て  
現在 全日本自由労働組合書記、機関紙『じかたび』編集部員。

ご感想、ご意見、今後のルポ運動のご提案 機関紙ルポの作品など、  
下記協会にお送りください。

ルポルタージュ研究

第1回機関紙ルポ研究会の記録集

1978年7月15日発行

|       |                     |
|-------|---------------------|
| 著 者   | 原 一彦                |
|       | 松 沢 常 夫             |
| 発 行 所 | 日 本 機 関 紙 協 会       |
|       | 東京都港区西新橋3-17-8      |
| 振替口座  | 東 京 0 - 1 7 7 1 1 8 |
| 取引銀行  | 東京労金新橋支店 2 2 8      |
|       | 富士銀行新橋支店 78887      |